

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	由利 幸久
論文担当者	主 査 山門 亨一郎
	副 査 小柴 賢洋
	副 査 波多野 悦朗
学位論文名	Implication of Psoas Muscle Index on Survival for Hepatocellular Carcinoma Undergoing Radiofrequency Ablation Therapy (ラジオ波焼灼療法後の肝細胞癌患者の生存期間と Psoas Muscle Index との関連)
論文審査の結果の要旨 【目的】肝硬変は、蛋白エネルギー低栄養等の代謝異常により、二次性サルコペニアを高率に引き起こす。骨格筋量の減少は、肝細胞癌(HCC)の外科手術例における予後不良因子であることが多くの研究により報告されている。しかし経皮的ラジオ波焼灼療法(RFA)を受けたHCC患者の生存率において骨格筋量の影響を検討した報告は少ない。そのため、初回治療としてRFAを施行したHCC患者の生存期間に対し、腸腰筋 index (PMI) を筋肉量の指標に用い、その影響と意義を後方視的に検討した。 【方法】2007 年 1 月から 2015 年 7 月までの間に、初回治療として RFA を施行した HCC 患者 182 人を対象に検討を行った(男性 111 人、女性 71 人)。筋肉量の評価は、治療前の腹部 CT 画像にてマニュアルトレース法にて計測した第 3 腰椎の PMI を用いた。主要評価項目は、全生存期間とし、生存に寄与する因子について解析を行った。 【結果】ROC 解析を用いた PMI の至適カットオフ値は男性で $6.31\text{cm}^2/\text{m}^2$、女性で $3.91\text{cm}^2/\text{m}^2$ であった。PMI 低下群($n=90$ 人)の 5 年累積生存率は 51.5%で、PMI 非低下群($n=92$ 人)では 86.5%であった($p<0.0001$)。多変量解析では、PMI の低下、総ビリルビン$\geq 1.2\text{mg/dl}$、PIVAKAII$\geq 34\text{mAU/ml}$ が、全生存期間に寄与する独立した予後不良因子であった。 【考察】PMI 低下群の生存期間は PMI 非低下群と比較して有意に短期間であった。またそれは肝予備能によらず、HCV 持続感染症例についても上記の結果と同様の結果が得られた。このことから、PMI は RFA 施行後の HCC 患者の予後予測に有用と考えられた。本研究は、筋肉量が HCC 患者の予後に関連するという重要な知見を明らかにするとともに、臨床的な応用も期待されることから、学位論文に値するものと判断した。	